

## 明治十年代の京都冠句の傾向

富田 和子

### はじめに

明治十年代といえば同十年西南の役などの影響もあつて暫く物価が高騰するが、同十一年五月パリ万国博覧会への参加や同年六月京都で博覧会開催の話題など庶民も新しい時代に慣れて来たと見てよい頃であろう。当時の冠句集の編集意識は名古屋の狂俳集と同様で、次の『冠歌京の水』(明治13年夏 轡家芝雄撰) 自序に見られる如くである。

冠歌京の水ト号け、諸風子の詠吟を集め、勸善懲惡の理非を論し、童蒙の教へ草と拔萃を彫刻なし、普く弘通しける也。 明治十三庚辰年夏 轡家芝雄

とはいえ、『雜俳集成』第二期12「雜俳雜聚2」で明治の京都冠句を一読すると、作品には季節や人情の機微を詠むものが多く、文明開化の意識や時代を反映した句は少ないように感じる。

ところでこの『冠歌京の水』は題をいろは順に並べ初学者向けにと編集し、『<sup>(注2)</sup>名家玉の聲』(明治19年 聚玉社・

玉群社蔵板）は「通信交際の不便なるを」解消するためにと一四八名の作者の実名・住所・俳号・作例を載せて紹介する。京都冠句は明治十年代では京阪中心であったが、『（注2）冠名家玉の聲』や同三十年『（注2）近世冠句京羽二重』（福知清次郎編）には作者の所在地に京阪の他、東京・下総・伊勢・近江・大和・土佐等が見え、京阪の冠句が全国的に交流を持ち行われたことが窺われる。文化東遷と叫ばれて久しい明治十年代の京都冠句が「勸善懲惡の理非を論し、童蒙の教へ草」にと表現した世界の一端を、まず当時冠句判者を職業とした人々の撰句の傾向を窺うことから考察する。

## (1) 明治十年代の傾向

当時の京都冠句の傾向を窺うために『（注2）冠句十會すまひ』（岡橋松四郎編 明治15年刊）から『（注2）冠名家玉の聲』に「冠句判者」とある京都在住の4名の上位句（天地人感吟句）を引用する。撰者名の下に『（注2）冠名家玉の聲』の記事（住所・氏名・作句例など）と掲載丁を記す。引用句の作者名下も同書に載る場合に、職業等を適宜記した。以下同じ。なお『（注2）冠句十會すまひ』は「狂俳」と角書があるが冠句であつて名古屋の狂俳とは異なる。

◎轡家芝雄撰「堀井伊助父 三世轡家「嬉しいナア 今年も花に顔合す」（49丁表）（堀井伊助は48丁裏に書物仕立業下京醒ヶ井通五條上ル\* 茂り屋芝蝶）」\*現在の下京区醒ヶ井通五條上ル。西本願寺の北方辺り。

① 若いナア 天案事る親の苦をしらぬ 榎月（太物類あつし・ぱつち足袋・染手拭シャツ商）

「案事る」は心配する。無鉄砲な若者に対する感想。心配する親の気苦労を知らないで、後先も考えずに無鉄砲な事をするなんて若いなあ。先物相場にでも手を伸ばしたのだろうか。

② 人氣が立 地金貨銀貨も飛上がる 綾丸（諸国向半衿仕入處 藪田庄兵衛父）

明治九年の金禄公債の発行、同十年の西南の役のため急に多額の不換紙幣の増発があり、夏頃から同十四年まで物価騰貴によって紙幣価値の下落。同十四年には米価等は約二倍にまで騰貴。（小野秀雄編『新聞資料明治話題事典』

「明治七年の物価」の項。東京堂出版 新装版 平7）紙幣価値の下落が金貨銀貨の評判を高めて、価値が安定した。

③ 恥かしい

皮脱ぎや同じ世の鬻體

君 駒（酒商 下京縄手通新橋上ル）\*

「こんな貧乏だから生きているのがつらい」と言っているのを慰めている。何を着ていたって、一皮剥けば同じ骸骨になるよ。\*現在の東山区元吉町辺り。京阪電鉄三条駅の南辺り。

④ 暖い

感吟 若葉産ミ出す比良伊吹

福 助

「比良」は滋賀県琵琶湖西岸の山の名。比良の暮雪は近江八景の一。「伊吹」は滋賀・岐阜県境にある山の名。伊吹風は有名。暖かいと思つたら、寒風で有名な比良山も伊吹山も新芽が萌え出して美しい。

⑤ ちから入

感吟 冥途へ響け迎ひ鐘

柳 雄

「迎鐘」は八月八日（旧暦七月）に京都東山区の珍皇寺（臨済宗建仁寺派）に詣で、本堂の東側にある鐘樓の鐘をつくとそれをきいて精霊が来るという。この本堂前は石地蔵が多く並び、俗に六道辻（現世と冥途との境）と呼ばれる。秋の季語。新盆なのだろうか。何となく哀れさ寂しさが伝わって来る。精霊を迎えに六道辻を越えて冥途まで響けと、力を入れて鐘樓の鐘を撞く。

京都冠句のほとんどが話し言葉風に出題されており、ここでの芝雄の撰は他者の観察と叫びやがテーマ。

◎吉日庵暦平撰「東洞院通五條南入二丁目福島町」\* 西川辰之助 蕉門別号 夏盛庵 父 雲峰 五世吉日庵「秋じゃなあ 哥によまる、唐がらし」（45丁裏）」\*現在の下京区東洞院通五條下ル二丁目。東本願寺と涉成園の北辺り。

⑥ 吞過て 天親思ふ身も千鳥聞く

柳 雄

「吞過て」から千鳥足。「千鳥」は哀調を帯びた声で鳴く。冬の季語。吞過ぎて千鳥足になって、千鳥の哀調を帯びた声を聞くと、老いて足元の頼りなくなつた親のことが思い出されて感傷的になる。

⑦ 桜見て 地聖りのきざす凡夫心

五 洞

美しい桜を見ていたら、聖人の心にも凡夫の浮気心が起こつてきた。

⑧ 恋しいナア 人空行鳥もわがなミダ

吟 之

どんなに恋しくても逢う事ができないでいると、空を飛んで行く鳥が羨ましくて、私の涙の原因になってしまう。すぐにでも飛んで行きたい気持ち。

⑨ 桜見て 感吟靈地踏日ハいつも春

飛 雀

「靈地」は神仏の靈験あらたかな地。桜の花が咲いたのを見て、四国巡礼に出かける良い季節になつたと思う。

⑩ 朝夕に 感吟座禪して得る法の奥

松 悦（呉服悉皆商 下京四條通猪熊西入）\*

勤勉な修行僧。毎日座禪を続けて、仏法の奥義を極める事ができるのだ。\*現在の下京区四條通猪熊西入ル。阪急電鉄大宮駅東辺り。

⑪ 天氣がよい 感吟見舞ふた医者も留守譽る

清 芝

よい天氣に誘われて散歩に出かけた後に、往診に来た医者が元氣になつたのを驚いて褒めていた。

ここでの暦平の撰には、自己の感情を中心に据えて表現されたものが多い。

◎信時庵雙羽撰「京 小山清六「仙人めかし 霞汲うと書生洒落」(9丁裏)」

⑫ ひら／＼と

天 弥陀の夢見に花が降

五 洞

「弥陀」は阿弥陀（仏名）の略。「夢見」は夢を見ること。「花が降」は散花（清めるために紙製の花などをまいて仏に供養すること）の様子。阿弥陀様の夢を見た。そこでは有り難い蓮の花びらさへもひらひらと降っていた。

⑬ 治り／＼

地 塗炭とやらを知らぬ民

壽 丸

「塗炭」は泥と火。非常な苦しみ、艱難の譬え。平和になって明治政府は有り難い事だ。

⑭ 知らぬ顔して

人 名告りや不為の涙だのむ

松 月（官許商標〈万 京羽二重綿〉）

「傾城阿波の鳴門」八段目「巡礼唄の段」の趣か。「不為」はためにならないこと。「涙をのむ」は涙をじつと堪える。名乗ったらこの子のためにならないと、涙をじつとこらえて知らぬ顔をしていた。

⑮ きれいな／＼

感吟 親のこゝろを貰われる

壽 丸

深窓のご令嬢。さすが高潔な親の薫陶をうけて、そのまま親の気質を受け継いでいる。

⑯ 恋じゃナア

感吟 逢にのぼつて恥かしい

京 梅 史（醤油商 下京川原町通三條下ル）\*

恋の仕業でしょう。前後も弁えず、京都に逢いに行つた自分の行いが恥かしい。\*現在の中京区河原町通三条下ル。

⑰ 夢じゃナア

感吟 御法り尊ぶ鎧脱ぐ

松 悦

「御法り」は仏法。「鎧脱ぐ」は戦を止める。今の世の中は夢のようだ。もう戦はなくなつて信仰の世界を尊ぶようになった。平和な時代。

ここでの雙羽の撰は心理的な事柄に感心。

◎金花山正福撰「下京第六組山崎町\* 西村宗助 三世金花山「俳友ハ是 無沙汰苦にせず膝合す」（18丁表）」\*現在

の中京区河原町通三条下ル二丁目。

⑱ 念仏申

天僧ハ手向の一枝切る

柳 曲

どんな時にも念仏が口から出てくる門徒宗の坊主が、仏に捧げるための櫛を一枝切り取る時にも念仏を唱えていた。

⑲ 結び合ひ

地語りや不思議に寄る因ミ

廉 水

偶々出会った人と互いの身の上話をしていると、何の關係もないと思つていた相手と不思議に縁がつながっていることがわかった。

⑳ 施しすぎ

人 今日も奇特の沙汰ニ合ふ

松 悦

「奇特の沙汰」はめつたにないようなすばらしいこと。陰徳を積んだ人は偶然今日も素晴らしいお返しを受けた。

㉑ いつ迄も

感吟 皇国ハ千代のさゝれ石

松 月

「皇国」は天皇が統治する国。昭和二十年頃まで日本の異称。「さゝれ石」は小さい石。国歌「君が代」(明治13年現行曲作曲、同26年文部省が祝日大祭日唱歌の一に制定)を踏まえる。いつまでもこの国は巖となるまで永遠です。

㉒ 論ハ否や

感吟 世を雲水と頭陀袋

達 花(書物仕立業)

「雲水」は雲と水。「頭陀袋」は僧が行脚の際、胸に掛けて三衣(大衣・七条・五条という用途の違う三種類の袈裟)等を収めた袋。「難しい論はお断り。」と、修行僧は世間を行雲流水と悟つて頭陀袋を首からかけて遍歴する。

㉓ 月を見て

感吟 憂ちらす夜もある配所

芝 鶴

鬼界島に流された俊寛の倅か。「憂ちらす」は憂さを晴らす。「配所」は罪によつて流された場所。流刑地にいるつらさを、月の晩だけは綺麗な月を眺めて慰めることができた。

ここでの正福の撰は神仏や不思議な事柄に興味を示しているものが多い。

京都冠句のほとんどが話し言葉風に出題されており、明治十年代の京都冠句は題と付け句が付き過ぎたものが多いが、冠句判者を生業とする人々の撰句に共通して窺える事は、題の気分を素直に表現した付け句が多いことで、必ずしも「勸善懲惡の理非を論し、童蒙の教へ草」となる事に拘っているとは言いがたい。が、芝雄撰に③の髑髏、⑤の冥途・迎ひ鐘、暦平撰に⑦の聖、⑨の靈地、⑩の座禪・法の奥、雙羽撰に⑫の弥陀、⑬の御法り、正福撰に⑭の念仏申・僧・手向、⑮の因ミ、⑯の奇特の沙汰、⑰の頭陀袋と上位句に神仏や信仰に関係するような素材を含む句が多く、それらに対する関心の高さが窺える。

## (2) 文明開化への反応

次に『雑俳雑聚2』に載る明治十年代の三撰集から文明開化を意識した句や時代を反映した句を引用してみる。

① ろくにも聞かず

開けぬ人が世を譏る

梅 司『冠歌京の水』（明治13年刊）

「開けぬ人」は旧弊の人。新しい変化について行けない人が耳も貸さずに文明開化を批判する。

② 納りく

嘆きし民も世を祝ふ

葉 左

世の中が納まって今まで不幸だった人々が世の太平を喜んでゐる。

③ 京モ田舎モ

首 同じ布告の意に馴泥なじど

寺戸 梅 山

江戸時代は幕府が一般に知らせる場合は御触書といい、明治十三年当時は、官庁発の法令は布告・布達・達・告示の四形式あった。（朝倉治彦編『明治官制辞典』東京堂出版 昭44）京の都でも田舎でも、全国一斉に同じ太政官布

告の意図に従う。

④ 態わざざくと

電信機では言へぬ訳

メ 丸

明治十一年六月京都の博覧会でテレホン伝声の器械を展覧し、二町程（二二〇m）を通過して見せた。当時の人々は大音声で器械が壊れそうだったらしい。（『新聞資料明治話題事典』『明治十一年のテレホン伝声機』の項）電話口で話しかけると他の人にも聞かれるのでわざわざ出かけて行って直接話をした。

⑤ 埒が能い

人で減らして機械買ふ

フシミ司 楽（運送店 山城伏見下板橋東詰）

「埒が能い」は埒が明くて、物事がはかどる。「山城伏見下板橋東詰」は現在の京都市伏見区下板橋町辺りの濠川ほけかわに架かる下板橋の東岸。運送店とは舟運業であらう。人手を減らして資金調達し、動力船を買って輸送がはかどる。

⑥ 今比に

小判デ返せとハ御無理

メ 丸 『狂俳 冠句十會すまひ』（明治15年刊）

轡家芝雄撰の内。明治四年新貨条例制定。古い人間はまだ金貨・銀貨よりも小判を信用している。使ってしまった今頃に、ましてや円のの時代に小判で返せとおしやるのはご無理なことです。

⑦ ゑらいやつ

女子でも義ハ皇国風俗

素 松

吉日庵暦平撰の内。「皇国風俗」を素直に褒めている。女子でも忠君愛国の精神には感服する。男勝りだ。

⑧ 国の徳

ひらく人智を尊がる

打睡庵山雄（冠句判者 士族 京都府上京区武者小路新町西入）\*

『冠名家玉の聲』（明治19年序）

「ひらく人智」は義務教育（明治5年学制・同13年の改正教育令・同19年学校令発布）を示唆するか。「尊がる」はしきりに尊ぶ。国家の美点は文明を開化する人間の教育をしきりに尊ぶことです。\*御所の西側辺り。

⑨ 静な事

道は開けて正しふに

花廼家胡蝶（小間物商 大阪府東区北久太郎町二丁目）\*



政治情勢は静かとは言い難いが、②同様、庶民生活は平穏で活気が蘇っていたのだろう。静かな事に、進む方向は開けて正しく進んでいる。\*現在の大阪市中央区船場中央二丁目辺り。

⑩ 自由して 民も開化の御代諷ふ 時鳥庵茶醉（職業の記載なし。近江國蒲生郡鑄物師村）\*

「自由して」は自由になって。自由になって民衆も文明開化のこの御代を謳歌する。自由民権運動（明治7年～同22年頃）。これは評判がよかったのか、明治三十年の福知清次郎編『俳都の調』<sup>（注2）</sup>の巻頭句で再録されている。\*現在の滋賀県蒲生郡蒲生町鑄物師。琵琶湖の南方。

⑪ 知恵磨き 広う地球の貨幣拾ふ 渡月庵花住（珠数打敷商）

商人の発想らしく市場を世界に向けている。知恵を磨いて、広く世界の貨幣を集めて大儲けする。

『冠歌京の水』六二八句・『冠俳句十會すまひ』八二〇句・『冠名家玉の聲』一四八句で合計一五九六句中、この趣向の句が全体に占める割合は低く、一割を越えそうにはない。これに対して叙景句・叙情句の割合は高い。

### (3) 伝統尊重

叙景句・叙情句をはじめに序を引用した『冠歌京の水』からいくつか引用する。

① いさぎ能ふ 荒鶺の揃う簪り船 一朝

「潔い」は明快で心地よい。小気味が良い。「荒鶺」は気負いたった鶺。鶺飼では主に海鶺を使い、体羽はピロード黒色で、紫・青・緑等の光沢がある。桂川や保津川・宇治川では平安時代から行われた。鮎は月明を嫌う。夏の夜の

暗闇に川面に光沢のある氣負いたった鵜と火の粉の飛び散る篝火を載せた鵜飼船が揃っている光景は小氣味が良い。

② いそがしい 入日の曇る麦埃り 一朝

「麦埃」は麦打作業の時に出来る埃で、夏の季語。麦打作業の忙しい時期は、初夏の澄んだ夕陽が曇って見えるほど盛んに麦埃がたっている。

③ 論もすみ けふ八田に見る水の月 太ッ哥 轆

「論」は喧嘩。ここでは水争い。「水の月」は水面の月と水無月を掛ける。田植えの後での水を巡る喧嘩もすむと、すっかり夜になっていて、いつの間にか出ていた月が、水のいっぱい満ちた田の水面に映っているのを見て安心した。一段と美しく見えたことだろう。7月初旬（旧暦5月20日頃）の月の出は夜十時過ぎで、次第にもっと遅くなる。

④ さへ切て 氷柱の並ぶ冬の月 イワタ山 月

「さへ切て」は空氣が冷たく「冴えきって」いる状態。空氣が冷えて冴えた冬の月に照らされた氷柱が並んでいる。

⑤ 軒にたち 初雪見てる箒杖 春 曙

軒下に立って箒を杖にして、美しく積もった初雪を眺めて、すぐに掃きだすのをためらっている。冬の訪れに感動。

⑥ 腰かけて 豆茶に月を浮かして 鳩 丸

「豆茶」は「夏涼の頃夜分涼の場所其外橋々杯へ腰掛茶屋を出し……豆茶はいり豆・あられに塩を入」れて出したもの（『浪花方言』文政二年頃）。夏の飲料。夏の夜の涼みに腰掛けて、湯のみ茶碗の中の豆茶に月を浮かべるように映してゆったりと楽しんでいる。

⑦ 臍か、へ 片手で釣た雷の蚊帳 一朝

急に雷鳴が轟いたのに驚いて、あわてて片手で臍を隠し、もう片方の手で雷避けの蚊帳を釣った。大人になっても

雷に臍を取られるのは怖い。

⑧ ほつとして

中暖簾まで嫁の顔

松 月（官許商標〈万 京羽二重綿〉）

「中暖簾」は店先に垂らした屋号等を染め抜いた布ではなく、店と奥の間に垂らした布。その先には関係者以外は入らないのが通例。お店では嫁の顔で緊張しているが、中暖簾をくぐって奥に入ると気が抜けてほつとする。

⑨ 構ておくれな

人 恥は浮世のうしろ面

綾 丸（諸国向半衿仕入處 藪田庄兵衛父）

「後面」は歌舞伎の趣向の一。後頭部にも面を付け、前後の面でそれぞれ別の役に演じ分ける。この世の中には裏と表があるのだから、裏ばかり問題にしないでくれ。

⑩ 苦労して

大尾 捨てた思案の道戻る

鳩 丸

難問に苦悩する姿。いろいろ考えた末、結局最初の考えに戻った。

⑪ 荷になれど

茶に水添へて宇治戻る

松 月

美味へのこだわり。荷物になるが、水にこだわってお茶と一緒に宇治川の水を汲んで宇治から京都まで帰った。

叙景句や叙情句の傾向は身近な環境や活気へのこだわりといってよく、詳細に解釈していくと、庶民生活の中の人情の機微や習慣等が理解できておもしろい。

## ま と め

明治十年代の京都冠句の傾向は寺社の多い京都ということもあつてか、どちらかと言えば時代色のある句よりも神

仏に対する関心の強い句の方が、上位句に採られ易い。また、精神面へのこだわりが窺われ、その表現した世界には「無益の句より成る一千言よりも、聞きて安穩を得る一つの益ある句を勝れたりとす。」というような啓蒙的発想を踏まえ、庶民生活の中に蘇った自由な活気を映し出そうとしたものであった。現代川柳的な社会風刺とは異なり、生活の中の個人の感情を映すものがほとんどで、土地柄からも新時代の影響は少なく、古い形のものが多い。しかし、二十年代以降、正岡子規が俳諧を否定した後も、全国的に交流を持ち、流行していたという事実から、俳諧的制約にとらわれず、庶民生活の中に蘇った自由な活気を映し出そうとした庶民の意欲の大きさが窺えるのではなからうか。

また、雑俳には破礼句が多いと見られがちであるし、勿論、全く破礼句がない訳ではないが、素朴で直接的に表現されたのは人間の滑稽さであって、その全てが下品であるとは言えない。第一項の冠句判者撰の上位句に破礼句は見られず、第二項でも文明開化の新しい息吹を素直に受入れて表現するし、第三項の伝統尊重句では冠句形式の中で自然や人間の躍動感や美しさなどが感じられた。このように冠句が雑俳様式の一つとして表現できる世界は持っていたし、明治初年以後の京都冠句の方向性は、現代冠句にも生きている。

## 注

- (1) 「文明開化と『狂俳眠りごまし』」『椋山女学園大学研究論集』23号2部七五頁
- (2) 鈴木勝忠編『雑俳集成』第二期12「雑俳雑聚2」私家版 平5 所収。

(平成八年十一月)

前号訂正 (狂俳に見る名古屋の庶民感覚)

九五頁6行目・8行目 「春」を「夏」に訂正。